

Q：内容構成の「地域と生活」に関係する単元の「とびだせ探検隊」では、どんな気付きを期待したらよいでしょうか？

A：身近な人のすごさに気付く

私は、第13回の札幌地区研究大会の授業が強く印象にあります。この単元の目標は、町の人にインタビューしたり、商店街をのぞいたりして、町の人や町の様子に関心をもつことです。そして、自分たちの生活が多くの人とかかわっていることが分かり、町の人と適切に対応することが出来るようにすることです。また、この単元で子どもたちに気付いてほしいことは、自分と地域とのつながり、あるいは人とかかわる楽しさを味わったり、かかわり方を学んだりする活動からわかる自分自身の成長です。

この大会での授業者の素晴らしいところは、授業づくりの最初に疑問をもったことです。それは、2年生の子どもたちが果たして2～3回程度の町探検で、ねらっているような気付きが本当に生まれるのだろうかという疑問でした。

そこで授業者は、単元に入る前に子どもたちの生活圏で、子どもたちと普段からかかわっていそうな「身近な人」を徹底的に調べあげ、地域により「愛着」をもつことができるような支援のあり方を探っていました。

調査した結果、ガソリンスタンド、ケーキ屋さん、クリーニング屋さん、様々な飲食店、靴屋さんなどはありませんでしたが、利用している家庭が少ないので活動終了後「すてきな町」であると子どもたちが実感出来るのかどうか疑問だということになったのだそうです。

そこで目を付けたのが団地に住んでいる人たちでした。学校とも大変関係が深く、地域などでのボランティア活動も盛んです。その人たちの多くがいろいろな特技や趣味をもっていて、子どもたちは、きっと「すてきな人」と感じてくれるだろうと確信したそうです。

この町探検の学習が終了した後、子どもたちに様々な変化が現れたそうです。学校へ来てくださる人たちへ積極的に挨拶したり、子どもたちの方から話し掛けるようになったこと、団地内や地域で活動している人や事柄に関心をもち、それらの出来事などを朝の会で発表したり、子どもたちの生活の中で身近な話題となり交流するようになったこと、また進んで参加（清掃活動、地域の祭りなど）するようになったと話されていました。まさに、生活科の目標である「自分自身や自分の生活について考えさせ、子ども自身が生活者である」という気付きをしっかりと意識させた授業になっていたと思います。

このように、もう一歩先の気付きを期待することで、子どもの生活につながる気付きとなり、それが自立への基礎につながっていくのではないのでしょうか？